

中高年女性の衣生活に関する意識調査（第1報）－被服行動と着用意識－
 文化女大家政 筋野淑子 ○大井久美子 東京家政大家政 高月智志子
 仙台白百合女短大 千葉よう子 共立女大家政 小林茂雄

目的 今日の成熟した消費社会においては、物質的充実から精神的充実へと価値観も変化している。このような環境変化に伴い衣生活においても高級、高質、高感性化への志向変化が顕著である。本報では中高年女性をとりあげ、社会規範などの被服行動や着用意識について調査を行い、この年齢層の特性についていくつかの知見を得たので報告する。

方法 女子大生の母親である中高年女性（40～50歳代）を対象にアンケート調査を実施した。被験者の有効回答数は255名であり、調査時期は昭和63年10月である。データの分析は単純集計、クロス集計とし、被服行動や着用意識について40の質問項目を設定し、4段階尺度を用いて評定してもらった。次に評定結果に因子分析を適用することにより、基本的因子を抽出し、因子得点から被験者の特徴を検討した。

結果 単純集計の結果から、中高年女性の被服行動と着用意識については、「流行でも似合わないものは着用しない」「洗濯や保管に配慮する」「勤められても気に入らないものは購入しない」「気に入った服装は気分爽快にし志気を向上させる」「服装に考慮して人に逢う」「異性を意識して服装は考えない」「通販・カタログ販売は利用していない」の項目に、90%以上の人肯定していることが顕著となった。また因子分析の結果、基本的因子として関心性、機能性、同調性、志向性、流行性、伝統性、規範性、管理性、経済性などの12因子が抽出された。なお累積因子寄与率は58.12%である。クロス集計の χ^2 検定結果から、「サイズに対してゆとり量の多いものや伸縮素材」及び「デザインに個性がないという既製服に対する不満と保守的な服装志向」などの間に有意な関係がみられた。